

学校評議員 宮永 尚 氏 村上 健 氏 山香 昭 氏 柳澤 好治 氏が来校しました。



ICTの活用状況、学びに向かう姿、姿勢・礼儀、教室掲示、学校環境など、丁寧に見ていただきました。

NO.8 2022年5月 大分大学附属小学校

なんのために
目的をみんなで考えたから、自ら行動することができる。

NO.9 2022年5月 大分大学附属小学校

発表できる
集中して聴いてくれる人がいるから、自分の考えを発表できる。

NO.6 2022年5月 大分大学附属小学校

相手意識
相手がわかるように工夫しながら伝える。

NO.7 2022年5月 大分大学附属小学校

拍手のシャワー
拍手があふれる教室だから、自分らしさを出すことができる。

NO.1 2022年5月 大分大学附属小学校

個別最適学習
もっと知りたい。もっと学びたい。

NO.2 2022年5月 大分大学附属小学校

積極挙手
指先から、メッセージが出ています。

NO.3 2022年5月 大分大学附属小学校

対話の時間
新たな考えを知ることで、自分の考えも深く広がる。

NO.4 2022年5月 大分大学附属小学校

指さし確認
作業の行程と、安全面を確認する。

大分教育事務所 山香所長から頂きました
5月20日の「学校評議員会」参観にて

「力を発揮している姿」をとらえ、価値づける。(資料提供:大分教育事務所 山香昭所長)

本資料は、職員全員で共有するため、職員室に掲示しています。

令和4年度第1回学校評議員会 議事録概要（大分大学教育学部附属小学校）

1. 日時

令和4年5月20日（金）
10:00～12:00

2. 場所

附属小学校会議室

3. 参加者

（学校評議員）

宮永 尚 氏 村上 健 氏 山香 昭 氏
柳澤好治氏 以上4名

（附属小学校）

木村 典之／校長 櫻井 弘美／教頭
眞田 貴弘／主幹教諭 桐野 愛 ／指導教諭
梅木 崇裕／研究主任

4. 当日の内容

（学校経営方針について）

校長：本年度から「グローバルリーダーの育成」を学校教育目標の最上位に格上げして、重点目標を資質・能力で整理し直した。重点的取組は昨年度と本質的に変わらないが、項目や順番を見直し4点で整理した。

主幹：FUSYO VISION については、「改革の経緯と使命」「具体的な成果」「教育活動」「組織」の4点で示した。資質・能力は、3つの柱を知・徳・体で分け、9つのマトリクスに位置づけた。本校HPにも掲載しているので、各学校の参考となることを期待している。

主幹：各学年のテーマについては、学校の教育目標とつなげて各学年が児童とともに作成した。1年生だけは、入学式に示す必要があったので、1年部の担任で作成している。

山香：全体の構造は、焦点化されている。何を目指すかというビジョンは大切である。職員に共有されたと思うので、1年間の流れの中で取り組んで貰いたい。

山香：本日、感心したことがあった。家庭科を参観した際、私の心を読んだかのように、女の子が聞きたいことを先に説明してくれた。相手を見て、敬語を使って話しており「礼儀」ができている。今から何をするのか説明しており「自律」もできている。こういった姿を教師が逃さず、認めてあげることが大切である。

主幹：VISION に位置づけた9つのマトリクスは、運営委員会の提案においても職員の意識につながるようにしている。

柳澤：附属の存在意義は、県内のリーダー、見本となれるかということである。附属の子や先生だけが伸びるのではなく、地域の公立学校のヒントや見本となって、先生方の成長の場や研修の場となって欲しい。また、今の学校が抱えている課題を克服していく取組も必要である。

柳澤：今後、気にしないといけないことを4つ挙げるとすれば

①教育格差に対する支援②防犯、防災の取組③個人情報の扱い④特別な支援が必要な児童への対応、である。教育格差については、附属は公立に比べたらそこまで差が無いかもしれないが、全国的に見れば一過性でなく、今後益々広がってくる課題と感じている。附属においても公立学校の参考になる取組は必要である。個人情報については、しっかりと対応できていると思うが、信頼を失わないようにしなければならない。特別な支援が必要な児童の対応は、今後間違いなくもっと大きな問題となってくる。公立に帰った時に附属での知見が使えない、とないようにして欲しい。

柳澤：授業については、本日の参観で、先生がうまくICT機器を使っており、使い慣れていることが分かった。大変素晴らしいと感じた。

主幹：防犯防災については、4年に1度引渡訓練を行っている。本年度が引渡しの年度である。また、避難訓練は、4月すぐに研修を行い、火災・津波の避難訓練、高台避難訓練、予告無し避難訓練2回の年間で4回実施している。

柳澤：避難訓練が普通の学校より多く行われていることがわかった。本当の避難時は訓練と違うことが起きる。いざとなると予想外のことが起こるので、そういう視点を持って訓練を行うとよい。

村上：VISION は、いかに職員に共有して浸透させるかが重要である。校長のフォロワーシップも含めたリーダーシップの話が心に残った。私たちは、ステレオタイプのリーダーシップの姿にとらわれ過ぎていると本当の多様性を生かすことできないかもしれない。マトリクスに位置づけられた、違いを受け入れる「涵養」が入っていることによさを感じる。

主幹：VISION はツールとして活用していく。会議室、玄関、職員室など目に触れる場所に掲示して、職員の意識を高められるようにしている。

校長：着任して一番いいなと感じたことは、コミュニケーションを図る時に、相手に体を向けている姿である。児童も先生も「正対」という言葉を使っている。フォロワーとしてのリーダーの姿につながっていると思っている。

主幹：聴き手の話が出たが、あえて意識して放送による集会を行っていることも付け加えたい。それは聴き手、意図的に聴く力を付けていくことを意識している。

宮永：木村校長は、公立小学校から赴任されたので、いろいろ比較できると思う。私は附属小の変革を見てきたが、当時、変化が急すぎた状況であったと思う。しかし、その過程があったからこそ、進歩した今があると思う。今後は、公立のモデルとなって欲しい。社会に出たら、頭の良さよりというよりもコミュニケーション能力が大切かなと感じているので今後も育成を図って貰いたい。

校長：人事の面から言うと、外国語の指導力は3年経ったらかなり力が付いてくる。そして地域に返していく。学年主

令和４年度第１回学校評議員会 議事録概要（大分大学教育学部附属小学校）

任も学年経営を通して、マネジメント力を付けていく。また、統括学年主任が、学年主任をマネジメントして組織的な対応を行い、職員の人材育成を行っている。

柳澤：県の教育センターとのつながりはもっと見えていいと思う。教員免許更新制度が廃止となることから、県教育委員会は教員の資質向上に悩むことが想定される。附属と協力した研修の構築が今後必要になってくる。

（授業改善について）

桐野：授業改善においては、校内研究を中心としている。外部に向けた取組として、大分県教育課程研究協議会の改善の重点に沿った授業公開を予定している。５月３１日からスタートし、３回に渡って４教科ずつ公開していく。本年度は、ＩＣＴの活用が求められているので、活用する授業を公開していきたい。指導助言については、県教育委員会の指導主事を招聘しており、さらに県教育センター職員が授業を動画で撮影して、教育センター実施のフォローアップ研修で使用する予定になっている。

桐野：外国語の取組は、タブレットを使ってたくさんやり取りができるようにしている。その取組を本日までご覧頂いているような報告書で公開することにより、地域への貢献としていきたい。総合的な学習の時間については、単元計画の作成の仕方等を県教育委員会指導主事に講義してもらった。当日は、附属中学校の職員も同席して、９年間を見通した資質能力の育成に向けて、連携を図りながら取り組んでいる。職員室には、年間指導計画を掲示して、進捗状況が見える形にしている。

桐野：教科担任制については、３年生以上で国語、算数、理科の３教科で実施している。授業観察については、１８人の担任が年間それぞれ３回ずつ授業を行い、指導教諭と共に授業観察シートを使用して振り返りを行っている。昨年度からの改善点は、一人一台端末の使用についての視点を入れたことである。

（校内研究について）

研究：本校の校内研究は、①「学級経営」②「県の改善の重点を受けた授業研究」③「外国語活動・外国語科」④「生活科・総合的な学習の時間」の４つの点を大切にしている。それぞれ、重点目標、達成指標、重点的取組、取組指標、外部評価の４つの視点でまとめている。

研究：達成指標における昨年度との違いは、「学級経営」においては、自他者肯定群の割合を８２％から８４％に設定したこと、「外国語活動・外国語科」においては、指導教諭による評価を１・２年目の職員は２.７以上、３年目の職員は３.０以上と設定したこと、「生活科・総合的な学習の時間」においては、児童アンケートの肯定的回答を７５％から８０％以上と設定したことである。

研究：重点的取組では、「生活科・総合的な学習の時間」におい

て、思考ツール辞典への実践事例の追加を予定している。

（学校評価について）

主幹：詳細については、３回目の学校評議員会において、年間総括と共に説明したい。令和４年度版は、昨年度に学校評議員の皆様から意見を伺った後、指導教諭、学年主任、研究主任とともに相談しながら作成した。現在、運用を始めているが、第３回の学校評議員会までに意見を頂けるとありがたい。

柳澤：資料にも報告書を挙げているが、全国の附属が作成する報告書は、ほとんどが「やったこと報告」である。そうではなく、何が課題のポイントで、その解消のためにどういうことをすべきか、何を身に付ければよいのか、など、公立の先生方にヒントを示してあげる汎用性ある報告書にしていける必要がある。附属の存在意義をどう示していくかが問われている。指導主事を呼んで何かやりましたよということ自体が重要では無く、こんなツールを使うと、こんな変化がありますよと示してあげるべきである。また、小中連携もタイムリーである。附属の強みだし、どうすれば上手くいくのか等は教育委員会も知りたがっている。附属の取組が役に立つような、研究や報告になって欲しいし、他の附属と何か違うよねと思わせる取組を目指して欲しい。全国的に比較しても進んだ取組ができて大分大学附属ならできるという意味で言っている。

柳澤：校内研究では、数値を目標にしていることはいいことである。しかし、学級経営の５点セットの価値語は、伝え方によっては抽象度が増していくので危ないと感じている。児童の具体の姿で変容を捉えないと学校自体の自己満足となってしまう。自己他者肯定群の割合を８４％にしているのも、具体例があって設定しているのと、具体例が無く教師が感覚的に設定しているのでは全然違う。研究主任には、具体性をしっかり意識して頑張って貰いたい。

村上：ＡＬＴの活用ということと言うと、先生方とのコミュニケーションが大切になってくると思う。英語を学ぶから、英語で学ぶというところの取組が小学生にとって重要だし、合っていると思う。

主幹：本日は、ありがとうございました。頂いた、意見や課題については、今後に生かしていきたいと思います。次回は、９月１６日（金）教育実習中となっています。第２回目も参加をよろしくお願いいたします。以上で、第１回学校評議員会を終わります。

以上

（文責）主幹教諭 眞田 貴弘